

◇ 博物館だより ◇

諏訪湖オルゴール博物館 奏鳴館
SUWAKO ORGEL MUSEUM

〒393-8503 長野県諏訪郡下諏訪町諏訪大社秋宮大鳥居前

HP: <http://www.someikan.com/>

TEL: 0266-26-7300

FAX: 0266-26-1044

E-mail: info@someikan.com

1. 博物館概要

およそ1200年前が起源とされる「御柱祭」^{かんぼら}が行われ、全国の諏訪神社の総本社である諏訪大社を擁す諏訪は、諏訪湖が中央に、霧ヶ峰・車山・白樺・蓼科高原に囲まれた自然豊かな地。江戸時代、下諏訪町は中山道と甲州街道が交わる交通の要衝、温泉の出る宿場町として賑わい、戦前は製糸業、戦後は時計・カメラ・オルゴールなどの精密工業で栄えた。

諏訪湖オルゴール博物館奏鳴館は平成8(1996)年諏訪大社秋宮前、旧下諏訪町役場跡地に開館。建物は当時の庁舎を復元した大正浪漫あふれる外観。下諏訪町に本社があり、オルゴール生産では世界トップシェアを誇った㈱三協精機製作所(現:日本電産サンキョー(株))所蔵のアンティークオルゴールを主に約150点を公開している。

2. オルゴール概論

「オルゴール」という言葉は日本語(和製オランダ語)。オランダ語の ORGEL(オルゲル:オルガンの意)が訛りオルゴールとなった。音楽を奏でる不思議な箱を日本人がすべてオルゴールと覚え、伝えたとされる。英語では MUSIC BOX といい、鋼鉄製のくし歯をはじいて音楽を奏でる装置を指す。

オルゴールというと、小さな木箱からやさしい音...と思ひ浮かべる方が多いと思うが、エジソンが蓄音機を發明、ベルリーナの円盤式蓄音機が普及、ラジオ放送の開始で音楽が自由に聴けるようになる以前に、自動で音楽を演奏するオルゴールの華やかな時代があった。その起源はさらに遡り、1381年ブリュッセルのニコラスカーク塔の時計に設置されたカリヨン(時報として鐘を自動で鳴らし音楽を奏でる)とされる(図1)。

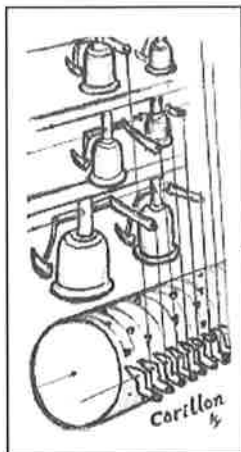


図1 カリヨンの仕組

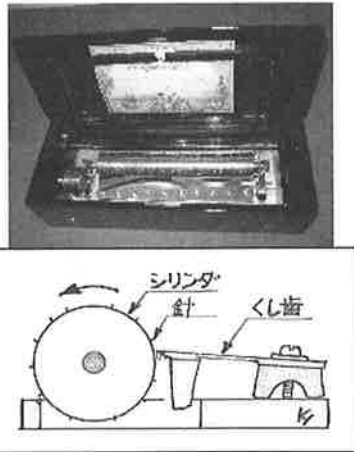


図2 シリンダオルゴール

3. 展示品の概要

当館の展示品を歴史や仕組の解説と共に紹介する。

人々に時を告げたカリヨンの大きな吊り鐘は、ゼンマイの發明による時計の小型化と共に小さなベルとなり、くし歯へと進化。1796年スイスの時計職人アントワヌ・ファールがシリンダオルゴールを製作する。時計の時報装置であったオルゴールはやがて時計から切り離され、自動演奏楽器として独立し発達する。図2のシリンダオルゴールは、シリンダが回転し、シリンダに打込まれたφ0.2~0.3mmの針がくし歯をはじいて曲を奏でる。複数の曲を聴くために、1本のシリンダに4~12曲を納めた機種、さらにシリンダごと交換できるインターチェンジブル、1曲を長く演奏する目的で、シリンダを太くしたり、らせん状にピッチ移動させるもの、ベル、笛、太鼓などを付属させ伴奏効果を狙ったものなど、さまざまな工夫がなされた。

しかし、何千本もの針を打込むシリンダオルゴールは高価でブルジョアのステータスシンボルに過ぎず、聴ける曲数も限られた。もっと多くの曲を聴きたいという願いに応え、1886年ドイツ人のパウル・ロッホマンが円盤を交換することで曲を替えられるディスクオルゴールを發明する。

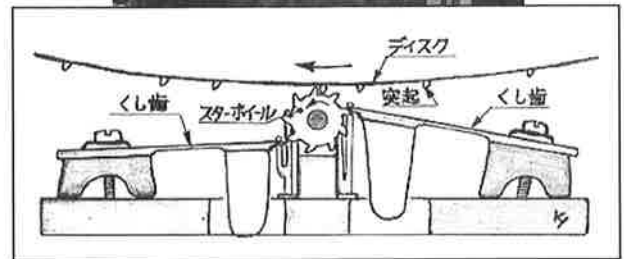


図3 ディスクオルゴール

図3のディスクオルゴールはディスクの回転により、ディスク裏面の突起がスターホイールを1ピッチ送り、スターホイールの爪がくし歯をはじいて曲を奏でる。シリンダの針に比べ強度のあるスターホイールを介するため、大型のくし歯をはじくことができるようになり、音量も豊かになった。

生産方式も変遷を遂げる。シリンダオルゴールがスイスを中心とした家内制手工業であったのに対し、ディスクオルゴールは産業革命後のドイツやアメリカを中心に、工場制機械工業による量産効果でコストダウンされた上、多くのメーカーが激しい技術・特許競争、シェア争いのなか、優れた製品を生み出していった。ディスクサイズは約4~30inchと幅広いラインナップ、ベル、太鼓、オルガンなどの付属品、後のスピーカーの原型となるバスレフ構造のキャビネットを持つもの、ディスクを自動交換するオートチェンジャー等。こうしてディスクオルゴールは人々が集まる酒場・レストラン・ホテルから一般家庭に至るまで普及し、讃美歌、当時の流行歌、クラシック等音楽を広く伝える使命を果たした。

しかし、蓄音機、ラジオの出現でオルゴールの歴史は終焉へと向かう。図4はディスクオルゴールの最後の姿。ディスクオルゴール3大メーカーの一つレジーナ社(米)が1905年に発売した蓄音機兼用ディスクオルゴールである。1914年に勃発した第一次世界大戦により、ほとんどのオルゴールメーカーが姿を消していった。



図4 蓄音機兼用ディスクオルゴール「レジーナフォン」

その後、オルゴールはTOY, GIFTなど嗜好品として小型の物が多く作られている。オルゴール発祥の国スイスに残ったメーカーに対し、太平洋戦争後、日本でもオルゴールムーブメント(機械)生産が始まり、持ち前の器用さと生産技術力により、生産量でスイスを上回る。諏訪の三協精機は1980年代には、世界の90%以上のシェアを占めるに至った。当館の体験工房では、三協OBらによる指導のもと、オルゴールの機械を組立て、箱や写真立てに組込んで完成するオルゴール作り体験が人気を呼び、5~6月は修学旅行生、夏休みは家族連れや若者、秋は観光客で賑わう。

4. 活動状況と今後の展望

現在、当館の体験工房では岐阜アクティブG、愛知万博、大崎ゲートシティ(東京)と出張体験により、ものづくりの楽しさを広くPRすると共に、館内に新設のワークショップで地域のものづくり仲間とタイアップしたオリジナル商品作り、体験で使用するオルゴール約350曲と商品を組合せたオーダ販売に着手。さらにインダストリー・ツーリズム(観光業と製造業が結びついた滞在型体験)を具体化させている。

アンティークオルゴールを構成要素ごとに見ると、演奏部は機械で、機構学、振動工学、金属材料・加工学の宝庫。出力は音楽であり、機種ごとに音楽家による編曲が不可欠。編曲技法が響きに影響を与える。当然、楽曲はクラシック。まさに有名な作曲家が活躍した時代のものである。キャビネットの材質・構造も楽器を手本とし音響効果に配慮されている。外装は当時の家具様式が垣間見えたり、彫刻、象嵌・螺鈿細工など美術工芸品としての見方もある。人形がダンスをしたり、シャボン玉を吹く動きには遊び心も感じられる。来館者にさまざまな観点で楽しんでいただけるよう努めたい。

アンティークオルゴールは100年以上前に作られたが、素晴らしい物であるからこそ、次代の人々が二度の大戦から守り、手を入れ大切に伝え遺した。今も現役で私達を楽しませてくれる。10年程前、筆者は三協で世界に冠たるオルゴール開発のテーマを与えられ、三協での最上機種80弁ディスクオルゴール「オルフェウス」を設計した。当館にも2台展示されている。「今、日本人は100年通じるものづくりをしているか？」アンティークオルゴールからそんなささやきも聞こえてくるようだ。読者の皆様、ぜひご来館下さい。オルゴールのやさしい音色に包まれてみませんか。

【博物館案内】

所在地：〒393-8503 長野県諏訪郡下諏訪町

諏訪大社秋宮大鳥居前

TEL:0266-26-7300 FAX:0266-26-1044

E-mail: info@someikan.com

開館時間：A.M.9:00~P.M.5:30(年中無休)

12月~2月はP.M.5:00まで

<オルゴールの生演奏とガイド>

A.M.9:30~ 最終P.M.4:30~

毎時30分より約30分間

<オルゴール作り体験>

A.M.10:00~ 最終P.M.4:00~

毎正時より約40分間

他にショップコーナー、喫茶あり

入館料：大人/個人800円・団体700円

小中学生/個人400円・団体350円

□団体割引...20名様以上

交通経路：JR 中央本線 下諏訪駅より徒歩10分

車 中央道 諏訪I.C.下車25分

岡谷I.C.下車15分

詳細情報：ホームページ <http://www.someikan.com/>

(文責：山崎克弘)